

西田尋問大詰め

水俣病裁判

35年以降も排水

「工場月報」に苦しい答弁

西田栄一元新日鐵水俣工場長(左)への証人調べの大詰めを迎えた水俣病裁判の第二十六回口頭弁論は、九日午前十時から熊本地裁民事三部(斎藤次郎裁判長係り)で開かれ、原告側の弁護団は、外国の文献や工場の秘密文書を証拠に西田証人に迫った。

午前中、原告側は一九二一年(大正十年)アメリカの化学者ジユリアス・A・ニューランドが「化学雑誌」に発表した論文を証拠として提出、この中で「アルデヒド合成でアセチレン吹き込み後の触媒には、どんな形でも無機水銀化合物は存在しない」と論じている点を指摘、「このことは触媒液の中に有機水銀化合物が存在していることになり、チツソのほうアルデヒド合成の過程で有機水銀化合物が生成する」とした文獻はない、という反論に、矛盾するではないか」とたじた。

西田氏は、ニューランドがアルデヒド合成の權威であり、その論

文がでた雑誌をチツソでも取って、いたことは認めたが「会社が反論した『有機水銀』というのは、船大研究班のいうメチル、エチルなどの低級アルキル水銀を意味したもので、すべての有機水銀化合物を否定したつもりはない」と答えてをそらした。

午後、原告側は三十五年の工場排水処理系統図や、排水月報など工場マル秘書類を示しながら「チツソは工場内循環にしたという三十五年六月以降も、以前と同じようにアルデヒド排水を水俣湾に流しつけていたではないか」と再び追及した。この点は九月にも

出した三十五年七、十月の月報ではほとんどを工場外に流したことになるため答弁に、つまり「事実はどうかわしれぬが、私は

緊急の時だけのつもりだったし、そう信じていた」と苦しい答え方をした。

西田証人の暴言はこの目で解する予定だったが、原告側の要請で十日午前中まで繰り延べられた。十日は午前中西田証人を喚べたあと、午後からは次の証人の元新日鐵水俣工場技術部長、根江敏氏(左)もチツソ専務の証人尋問に入る。